

2020年 6月28日礼拝式次第

日本基督教団半田教会
横山良樹牧師

招詞 : 詩篇 46 : 10

讚美歌 : 21-205番 (今日はひかりが) より2番のみ

今日は聖なる 安息の日よ 疲れた心 新たにされる

詩篇交読 114篇

祈 禱

すべてのものを造り、歴史を支配される全能の父なる神さま。
7日の旅路を守られて歩み、主の復活された聖日の朝に、わたしたちを招き、御言葉の説き明かすと、今日はまた主の晩餐に与らせて下さることによって、わたしたちの罪を赦し、神の民として整えて下さる恵みを感謝いたします。
6月がこの週で終わります。新型コロナウイルス感染症対策に揺れ動いた半年でありました。この出来事によって、わたしたちの築き上げてきたシステムや、考え方や、生き方が大きく振るわれました。元に戻ろうする努力や働きが続けられていますが、三密を避けることや、不要不急の外出を慎むことなど、そうした命を守るために掲げられるスローガンの背後に潜む事柄の本質を見定める信仰の目を、主よ、どうかお与えください。この半年の間、緊急事態が世界的に引き起こされたことによって、格差や、差別や、争いや、責任のなすりつけあいや、買い占めなど、わたしたちの中にある問題性が様々なあらわにされました。一方で、そうした事態に立ち向かい続ける者たちの働きにも目が向けられました。新しい日常の名の許で、わたしたちが作り出そうとするもの、戻ろうとする秩序、そこにはあなたからの示しと、福音によるわかちあひが必要です。キリストの贖いが私たちにもたらした希望が必要です。そのために何よりも罪と死の支配が、十字架と復活によって、克服されているという消息に、喜びをもって生きる群れが必要とされています。どうか、神さま、礼拝によって、わたしたちをあなたの希望に生きる群れとさせてください。主の御業のゆえに、分かち合いとゆずりあいと学びあいを恐れることなく、隣人の前に立つことの出来る者としてください。御言葉をとりつぐ者、奏樂する者、礼拝をささげる一人一人をお守り下さり、主の愛

によって、この場を祝福し、わたしたちに力をお与えください。今日は、知多奥田キリスト教センターでも朝礼拝と聖餐式がもたれます。どうか、知多半島における福音伝道の御業が御心に適って進められますように導いて下さい。この祈り、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン

聖書朗読：テサロニケの信徒への手紙 2 章 13～16 節

このようなわけで、わたしたちは絶えず神に感謝しています。なぜなら、わたしたちから神の言葉を聴いたとき、あなたがたは、それを人の言葉としてではなく、神の言葉として受け入れたからです。事実、それは神の言葉であり、また、信じているあなたがたの中に現に働いているものです。兄弟たち、あなたがたは、ユダヤの、キリスト・イエスに結ばれている神の諸教会に倣うものとなりました。彼らがユダヤ人たちから苦しめられたように、あなたがたもまた同胞から苦しめられたからです。ユダヤ人たちは、主イエスと預言者たちを殺したばかりでなく、わたしたちをも激しく迫害し、神に喜ばれることをせず、あらゆる人々に敵対し、異邦人が救われるように、わたしたちが語るのを妨げています。こうしていつも自分たちの罪をあふれんばかりに増やしているのです。しかし、神の怒りは余すところなく彼らの上に臨みます。

讚美歌： 21－59 番「この地を造られた」（1 番）

この地を造られた 御言葉に感謝
誰をも招かれて ゆく道てらす
いのちの言葉、たたえよ。

説教： 「人の言葉ではなく、神の言葉として」

今日の個所で、パウロは、テサロニケの人々が、パウロたちの語る言葉を、人の言葉としてではなく、神の言葉として受け止めたことを感謝しています。

それも絶えず神に感謝しています、と書くほどに最大限の喜びをあらわしています。わたしも伝道者のはしくれにつらなる者として、この気持ちは実によく分かります。語っているのは確かにパウロなのですが、人間パウロの言葉ではなくて、その実態は神の言葉である、という不思議さですね。わたしは説教をするではなくて、御言葉を取り次ぐという言い方をします。それは自分の意見を述べているのではなく、神さまから語るように命じられたことを取り次いでいる。そこで指し示される中心点はイエスがキリストであるという出来事です。わたしのために十字架にかかり、復活されたイエス・キリスト、神の子の消息が焦点です。そこにわたし横山が関わる部分は、横山がキリスト・イエスに出会って救われ、いかに用いられたか、また何を示されたかということであって、そこで説教者が崇められたり、尊敬を受けたりすることが目的ではありません。パウロも、横山も、神が崇められ、信じられるための手段として用いられることはあっても、自身が目的とはならない存在です。コリントの信徒への手紙のなかに、コリントの教会のなかで、わたしはパウロに、わたしはケファに、ではわたしはアポロに付くという派閥争いが起きた時、パウロは、アポロとは何者か、パウロとはいったい何者なのか、わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させて下さったのは神です。大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です、と述べました。以前、わたしたちの教会に修養会に来て下さった東京神学大学の小泉健先生も、わたしたちが御言葉のとおりの良い管として用いられるようにと祈ってくださいました。福音が無味無臭ということはないのです。パウロがこの前の個所で、自分たちがテサロニケでいかにあなたたちと出会い、キリストの福音を伝えたか、どのように振舞ったかを思い起こさせようとしているのは、福音が、パウロや、シラスや、テモテという人格を通して伝達されるものだからです。神さまは、わたしたちを用いて福音の器とされます。福音はバトンのように、駅伝のたすきのように、人から人へと伝えられてゆくものです。しかし、2千年前のパレスチナでイエス・キリストを通してあらわされた神の御業が、21世紀の極東の日本で生きるわたしたちとどこで関わるのか、その接点を、今を生きる横山という説教者を通して、フィルターを通して示さねばなりません。説教は、その意味で御言葉の解釈、あるいは語り直しが加えられますが、それはあくまで聖書全体のメッセージから離れてはならず、そのためにさまざまな聖書を理解するための学問的な研鑽を牧師は積むものです。それは語学であったり、教えを理解して適用してきた教会の歴史であったり、著名なキリスト教思想家たちの著

作であったり、そうした遺産と対話しながら、聖霊の導きを祈りながら、テキストの指し示す出来事に共にあずかりたいと願って、この講壇に毎週立っています。

パウロの感謝と喜びはとてもよく分かります。神の言葉には力があります。わたしたちを慰め、励まし、神とともに生きる新しい人格へといざないます。またそれは自分自身を作り替えるだけでなく、同じように主に召された者たちとともに、この福音を生きる群れを作ることへとわたしたちを召し出します。キリストを頭とするそれぞれの賜物をもって仕えあう主の体である教会を生み出す働きに参加する者とされるのです。そのことは、ここまでパウロがテサロニケの人々について、彼らが福音を受け入れた結果、神さまの偉大な御業が、彼らを通して明らかにされた結果、彼らはパウロたちを通して、主に倣う者となり、マケドニア州やアカイア州に住むすべての信仰者たちの模範となったことが記されています。

ひとたび福音が善い地に落ちて芽吹けば、それは30倍、60倍、100倍の実を結ぶと約束されたように、大きな働きを成し遂げることが可能です。しかし、同時に、道端に落ちたり、石地に落ちたり、茨が生い茂って枯らしてしまうような事態も起きる。御言葉の種を蒔いても実際に成長し、葉を生い茂らせ、花を咲かせ、実を結ぶことが出来るのはどれくらいでしょうか。そもそも、ここでパウロが神に感謝をささげているように、人間の取り次ぐ言葉が、神の言葉として受け止められるとは具体的にどういうことなのでしょうか。

むかし、神学校の授業でつぎのような話を聞いたことがあります。なんの本に載っている話なのか確認しておけばよかったのですが、さらっと小咄のように話されたもので出典や、ディテールが明らかではなく、うろ覚えなので、記憶に少し言葉を足してお話しします。

そこは大きな島で、たくさんの方が住んでいます。ある朝、一人の男が浜辺で紙きれの入った瓶が流れ着いているのを見つけます。ひろいあげて栓をあけ、紙を取り出して開いて見ると、そこには「救いは近い」と一言かいてある。なんのことだろう。誰かが救いに来るのだろうか。この島に救いを必要としているような誰かがいるのだろうか。分からない、不思議なことがあったと思い、紙を持ち帰る。妙に心惹かれるその言葉にざわつくものを感じながら、その男は一日を過ごします。しばらくすると男はふたたび浜辺で紙切れの入った瓶を見つけます。急いで拾い上げ、開いて読んでみると、「救いはますます近づいている。備えはよいか」と書かれている。備えとはなんだ

ろう。自分の生活に漠然とした不安を抱いていた男は外の世界からもたらされたこのメッセージを心の中で思い巡らします。もう瓶は流れ着かないだろうか。もっと読んでみたい。毎朝、男は浜辺を散歩し、瓶を捜します。あった！瓶を拾い上げ、紙きれを広げると、「あなたの罪は赦される」、そう書いてある。男の全身に電流のような衝撃が走ります。わたしの罪が赦される。どうして、どのようにして。それが本当だったらどんなによいか。近づく救いとはそのことだったのだろうか。男は毎朝、浜辺を歩き回り、沖に目を向け、流れ着くかもしれない瓶を捜します。そうして日を過ごすうちに、やがて男は7日ごとにその瓶が浜辺に流れ着くことに気づきました。そして、7日目の朝を待ちわびるようにして日を過ごし、その日が来ると、早くから浜辺に瓶を拾いに行き、なかのメッセージを読むことが生きがいとなります。その紙切れに書かれた言葉は男を力づけることもあれば、反省をせまることもありました。これまでとは違う、どこからも聞いたことのない言葉でした。その言葉が男の習慣を、語る言葉と行いを少しずつ変えてゆきました。家族の者がその変化に気づきます。やがて男から話を聞いた者たちが、男が拾い集めていた紙切れを読ませてもらい、その中から7日ごとに一緒に浜辺に向かう者たちが現れます。彼らは水平線の向こうに目を凝らし、瓶のなかのメッセージを誰が送ってくれたのだろうかと思い巡らすのです。やがて船を作り、瓶を送っている場所を見つけに行こうと言い出す者たちが現れました。—これくらいにしておきますが、だいぶ話を膨らませましたが、神の言葉が、わたしたちのもとに届けられるというのは、いまお話ししたような出来事だったのではないのでしょうか。瓶のなかの紙切れに記された言葉は、人の手になるものです。誰かが語ったことを記した文字です。しかし、それを拾って読んだ男は書かれていた言葉を重くしたのです。自分の言葉よりも、重んじた。その言葉で、自分を測りなおしてみた。やがて、その言葉を聴くことを心待ちにし、待ちわびるようになると、生き方が変わってきます。待ち望む生き方に、自分の外からくる言葉によって生かされるライフスタイルが形作られるようになってゆけば、それこそ、言葉の中にある命に生かされ始めている証拠です。こうして、神の言葉は、そのうちに働く神の霊の導きによって、聴く者を御心のままに変えてゆくのです。到来する神の言葉はその者のうちで出来事となり、神の計画される結果へとわたしたちを少しずつ導いてゆく。これが2千年にわたって、神の言葉が宣べ伝えられた場所で起こされてゆく神の御業です。本当に感謝なことに、わたしたちはまもなくその御業をともに仰ぐことが許されています。

7月第二週に飯塚昂大さんの洗礼式を、わたしたちは執り行いますが、このように信じる者が起こされることは不思議なことです。2千年前のパレスチナに生きた方が、わたしの救い主であると信じて、それを告白し、人格と人生と共同体を形作る働きに人生をかけようとする者が起こされる。それは、宣べ伝えられた言葉を、人間の言葉としてではなく、神の言葉として受け入れ、対話をし、その中で培われていった出来事を、神の働きと認めて、告白をする、そのような業です。神の言葉が、この群れの中に生きて働いている。それは2千年前にパウロが神に絶えず感謝をささげたように、わたしたちを憐れみ、導き続ける神の愛のなせる業にほかなりません。このように主は生きて働いておられる。御言葉とともにおられる。この真実を認めて、ともに主の御名を崇め、喜びを分かち合いたいと願います。

お祈りいたします。

神さま、感謝をいたします。御言葉の中にある命に、あなたは、わたしたちを触れさせてくださいました。御言葉のうちに命があり、力があり、ご計画があります。言葉を重くすること、与えられた言葉により頼んで生きてみることに、言葉に持ち運ばれるわたしとなることによって、あなたの御計画が一人一人の上になりますように。世代の課題をかかえて生きるわたしたちに、人となられた神の言葉である主イエス・キリストが伴われます。礼拝によって、祈りによって、主の十字架と復活の消息につながれて、この世にあっても平安に生きる道を備えてください。そのことによって、あなたの愛と慈しみを世に現わすものとさせてください。この祈り、主の御名によって祈ります。

アーメン

讚美歌 21-401 「しもべらよ、御声きけ」(1番)

しもべらよ、御声きけ、「人々を、弟子とせよ」
勝利に満つる 主の御名と その栄えを 広め行け

使徒信条

聖餐式

献 金

報 告

添付の週報をご覧ください

祈 禱

主の御名が崇められるように。コロナウィルス感染症対策
下で、医療・介護・福祉に従事する方たちのために、とも
に礼拝をささげる日が与えられるように。

主の祈り

天にまします我らの父よ
ねがわくば御名をあげさせたまえ
御国を来たさせたまえ
御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ
我らに罪を犯す者を 我らがゆるすごとく
我らの罪をも ゆるしたまえ
我らを試みにあわせず 悪より救い出したまえ
国と力と栄とは 限りなく汝のものなればなり

アーメン

祝 禱

主イエス・キリストの恵みと、
父なる神の愛と
聖霊との親しき御交わりが
主の恵みのご支配を信じてこの世を生き抜く
あなたがた一同の上に、とこしえにあるように。

アーメン！